「講談社　青い鳥文庫」刊行のことば

太陽と水と土のめぐみをうけて、葉をしげらせ、花をさかせ、実をむすんでいる森。小鳥や、けものや、こん虫たちが、春・夏・秋・冬の生活のリズムに合わせてくらしている森。森には、かぎりない自然の力と、いのちのかがやきがあります。

本の世界も森と同じです。そこには、人間の理想や知恵、夢や楽しさがいっぱいつまっています。

本の森をおとずれると、チルチルとミチルが「青い鳥」を追い求めた旅で、さまざまな体験を得たように、みなさんも思いがけないすばらしい世界にめぐりあえて、心をゆたかにするにちがいありません。

「講談社　青い鳥文庫」は、七十年の歴史を持つ講談社が、一人でも多くの人のために、すぐれた作品をよりすぐり、安い定価でおおくりする本の森です。その一さつ一さつが、みなさんにとって、青い鳥であることをいのって出版していきます。この森が美しいみどりの葉をしげらせ、あざやかな花を開き、明日をになうみなさんの心のふるさととして、大きく育つよう、応援を願っています。

昭和五十五年十一月

講談社

講談社 青い鳥文庫

- 賢者のおくりもの　オー＝ヘンリー／作　飯島淳秀／訳
- あしながおじさん　ウェブスター／作　曽野綾子／訳
- ふしぎの国のアリス　キャロル／作　高杉一郎／訳
- 鏡の国のアリス　キャロル／作　高杉一郎／訳
- ピーター＝パン　バリ／作　飯島淳秀／訳
- 飛ぶ教室　ケストナー／作　山口四郎／訳
- 青い鳥　メーテルリンク／作　保永貞夫／訳
- 名犬ラッシー　ナイト／作　飯島淳秀／訳
- フランダースの犬　ウィーダ／作　松村達雄／訳
- サンタクロース失踪事件　クニスター／作　遠山明子／訳
- ニルスのふしぎな旅　ラーゲルレーフ／作　山室　静／訳
- 長くつしたのピッピ　リンドグレーン／作　尾崎　義／訳
- 川べにそよ風　グレアム／作　岡本浜江／訳
- 川べにこがらし　ホーウッド／作　岡本浜江／訳
- 砂の妖精　ネズビット／作　八木田宜子／訳
- ドラゴンがいっぱい！　ネズビット／作　八木田宜子／訳
- ハヤ号セイ川をいく　ピアス／作　足沢良子／訳
- アリスの悩み　ネイラー／作　佐々木光陽／訳
- アリスはひとりぼっち　ネイラー／作　佐々木光陽／訳
- アリスのいじめ対策法　ネイラー／作　佐々木光陽／訳
- アリスの恋愛テスト　ネイラー／作　佐々木光陽／訳

- 名探偵ホームズ　赤毛組合　ドイル／作　日暮まさみち／訳
- 名探偵ホームズ　まだらのひも　ドイル／作　日暮まさみち／訳
- 名探偵ホームズ　消えた花むこ　ドイル／作　日暮まさみち／訳
- 名探偵ホームズ　緋色の研究　ドイル／作　日暮まさみち／訳
- 名探偵ホームズ　ぶな屋敷のなぞ　ドイル／作　日暮まさみち／訳
- 名探偵ホームズ　四つの署名　ドイル／作　日暮まさみち／訳
- 名探偵ホームズ　囚人船の秘密　ドイル／作　日暮まさみち／訳
- 名探偵ホームズ　恐怖の谷　ドイル／作　日暮まさみち／訳
- ルパン対ホームズ　ルブラン／作　保篠龍緒／訳
- 怪盗ルパン　怪紳士　ルブラン／作　久米みのる／訳
- 怪盗ルパン　真犯人を追え！　ルブラン／作　久米みのる／訳
- 怪盗ルパン　二十一の宝石　ルブラン／作　久米みのる／訳
- 怪盗ルパン　地底の皇帝　ルブラン／作　久米みのる／訳
- 怪盗ルパン　奇岩城　ルブラン／作　久米みのる／訳
- 怪盗ルパン　踊る光文字　ルブラン／作　久米みのる／訳
- 怪盗ルパン　赤い絹のスカーフ　ルブラン／作　久米みのる／訳
- ホームズ少年探偵団(1)〜(4)　ニューマン／作　神島統夫／訳
- オリエント急行殺人事件　クリスティ／作　花上かつみ／訳



ノンフィクション

- 川は生きている　富山和子
- 道は生きている　富山和子
- 森は生きている　富山和子
- 窓ぎわのトットちゃん　黒柳徹子
- クジラと旅を　中村庸夫
- ウミガメの冒険　中村庸夫
- イルカと海の旅　水口博也
- リビングストン発見隊　スタンレー／作　山口進／訳
- 白旗の少女　比嘉富子



あなたのポケットに名作を！

ムーミンの本
トーベ＝ヤンソン／作・絵

- たのしいムーミン一家　山室 静／訳
- ムーミン谷の彗星　下村隆一／訳
- ムーミン谷の夏まつり　下村隆一／訳
- ムーミン谷の冬　山室 静／訳
- ムーミンパパの思い出　小野寺百合子／訳
- ムーミン谷の仲間たち　山室 静／訳
- ムーミンパパ海へ行く　小野寺百合子／訳
- ムーミン谷の十一月　鈴木徹郎／訳
- 小さなトロールと大きな洪水　冨原眞弓／訳

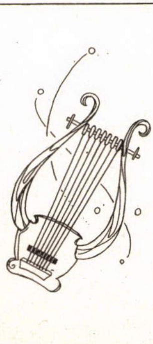
小さな家シリーズ
L＝I＝ワイルダー／作
こだま ともこ・渡辺南都子／訳　かみや しん／絵

- 大きな森の小さな家
- 大草原の小さな家
- プラム川の土手で
- シルバー湖のほとりで
- 農場の少年
- 大草原の小さな町
- この輝かしい日々



世界の名作

- 聖書物語(旧約編)(新約編)　香山彬子／文
- ギリシア神話　遠藤寛子／作
- 西遊記　呉承恩／作　松枝茂夫／訳
- 水滸伝　施耐庵／作　立間祥介／訳
- 三国志　羅貫中／作　駒田信二／訳
- グリム童話集(1)～(4)　グリム／作　池田香代子／訳
- 眠れる森の美女　ペロー／作　巌谷國士／訳
- 子鹿物語　ローリングズ／作　阿部知二／訳
- ロミオとジュリエット　シェークスピア／作　飯島淳秀／訳
- 赤毛のアン　モンゴメリー／作　村岡花子／訳
- クリスマスキャロル　ディケンズ／作　こだまともこ／訳
- 小公女　バーネット／作　曾野綾子／訳
- ああ無情　ユーゴー／作　塚原亮一／訳
- 三銃士　デュマ／作　桜井成夫／訳
- 巌窟王　デュマ／作　矢野 徹／訳
- 十五少年漂流記　ベルヌ／作　那須辰造／訳
- ガリバー旅行記　スウィフト／作　加藤光也／訳
- ファーブルの昆虫記　ファーブル／作　中村浩 江口清／訳
- シートン動物記(1)～(3)　シートン／作　阿部知二／訳
- 若草物語　オルコット／作　中山知子／訳
- 続・若草物語　オルコット／作　谷口由美子／訳
- プラムフィールドの子どもたち　オルコット／作　谷口由美子／訳
- プラムフィールドの青春　オルコット／作　谷口由美子／訳
- トム＝ソーヤーの冒険　トウェーン／作　飯島淳秀／訳
- トム＝ソーヤーの探偵　トウェーン／作　斉藤健一／訳
- ハックルベリー＝フィンの冒険(上)(下)　トウェーン／作　斉藤健一／訳
- ロビンソン漂流記　デフォー／作　中野好夫／訳
- 宝島　スチーブンソン／作　飯島淳秀／訳
- ジキル博士とハイド氏　スチーブンソン／作　加藤まさし／訳
- 日曜日だけのママ　メブス／作　平野卿子／訳
- 透明人間　ウェルズ／作　福島・桑沢／訳
- 宇宙戦争　ウェルズ／作　加藤まさし／訳
- 海底二万マイル　ベルヌ／作　加藤まさし／訳



講談社 青い鳥文庫　　21-9

小さなトロールと大きな洪水

トーベ=ヤンソン

冨原眞弓 訳

1999年2月15日　第1刷発行
2000年6月30日　第2刷発行

（定価はカバーに表示してあります。）

発行者　野間佐和子

発行所　株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21　郵便番号112-8001

電話　出版部　(03)5395-3535
　　　販売部　(03)5395-3625
　　　製作部　(03)5395-3615

N. D. C. 993　124p　18cm

装　丁　久住和代

印　刷　図書印刷株式会社

製　本　図書印刷株式会社

ISBN4-06-148503-2　（児一）

（落丁本・乱丁本は，講談社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にておとりかえします。）

■この本についてのお問い合わせは，講談社児童局「青い鳥文庫」係にご連絡ください。

＊著者紹介

トーベ=ヤンソン

1914年，フィンランドの首都，ヘルシンキに生まれる。ストックホルムとパリで絵を学ぶ。1948年に出版した「たのしいムーミン一家」が世界じゅうで大評判となり，以後「ムーミンパパの思い出」「ムーミン谷の冬」「ムーミン谷の夏まつり」など，一連の傑作を書いている。

＊訳者紹介

冨原眞弓（とみはら まゆみ）

1954年生まれ。パリ・ソルボンヌ大学哲学博士号取得。現在，聖心女子大学哲学科助教授。著書に「ヴェーユ」共著に「ムーミン谷への旅」訳書に「ギリシアの泉」「彫刻家の娘」「トーベ・ヤンソン・コレクション」(全8巻)ほか。

て短編集『聴く女』などです。その後のヤンソンさんが書いたおとなむけの作品は、日本では全八巻の「トーベ・ヤンソン・コレクション」（筑摩書房）にまとめられました。スウェーデン語系のフィンランド人であるヤンソンさんは、作品をスウェーデン語で書きます。そして八十四歳のいまも現役の作家です。

ムーミン谷では、おそろしい事件もかなしいできごとも、さいごにはしあわせな結末をむかえます。そこでは、危険も恐怖も、天災も不運も、すべてが、胸おどる冒険のための味つけとなりますが、おとなむけの小説では、いつもハッピーエンドとはいきません。どことなくおかしい語り口や変わった登場人物という点では、ムーミン物語と似ています。とはいえ、ときどきかなしい結末がまちうけているのは、ムーミン物語と決定的にちがうところでしょう。両方をあわせて読んでみると、きっとあたらしい発見があると思います。

シリーズ全体のつながりをたいせつにするヤンソンさんは、ほかの作品と感じのちがう『小さなトロールと大きな洪水』を、いずれ書きなおすつもりだったのです。じっさいに、半分くらいまで手を入れてみたりもしました。でも考えなおして、そのままのかたちで出版することになりました。いまの自分ならもっとうまく書けるかもしれないが、この物語にいっぱいつまっているひたむきさや若さが失われてしまうだろうと思ったからです。こうして、さいしょのムーミン物語がもういちど出版されるまでに、かなりの時がすぎてしまったのです。

九冊のムーミン物語は、一九四五年から一九七〇年のあいだに世に出て、世界じゅうの子どもとおとなの心をとらえ、いまも読みつづけられています。さいごのムーミン物語『ムーミン谷の十一月』と前後して、ヤンソンさんは小説を書きはじめました。自伝的な要素の強い『彫刻家の娘』や『少女ソフィアの夏』、そし

作品では、家族とわかれて、ニョロニョロとどこかにいってしまいます。ムーミンママとムーミントロールはすむ家もなく、暗い森をさまよいます。たくさんの家族がばらばらになり、たくさんの家が焼けてなくなってしまった、そんなつらい戦争の現実が影をおとしているのでしょう。でもさいごには、はなればなれの家族もめでたく再会し、ムーミンパパのつくったすばらしい家におちつくのです。

暗い世相をうつすように、ムーミントロールの顔つきや体形も、あとのものとはかなりちがいます。もともとムーミントロールは、画家になる修業をしたヤンソンさんが、雑誌に挿絵をかいていたときに、サインがわりにつかっていた「小さな怒った顔をした生きもの」でした。ところが、戦争の記憶がすこしずつ遠のいていくにつれ、ムーミン物語の主人公も、だんだん丸くなり、かわいらしく、愛想もよくなります。『ムーミンパパ海へいく』では、うみうまたちに「たまごぼうや」とからかわれるほど、まん丸くなっています。

かいて、息がつまるような色のない世界を笑いとばそうとしました。ところが、似顔絵があんまり似すぎているというので、雑誌にのせてもらえないのです。油絵もかいてみましたが、大好きなはずの明るい色はつかう気がしなかったので、キャンバスはどんよりした青や灰色だらけになってしまいました。そこでヤンソンさんは思いました。「むかしむかし、あるところに」ではじまる、たのしいおとぎ話を書こう、と。こうしてムーミントロールの物語が生まれたのです。

一九四五年、戦争がおわりました。あいかわらず物はたりないし、窓ガラスや屋根はあちこちこわれていましたが、みんなはうれしくなって夜の町にくりだしました。駅にはひさしぶりに明かりがともりました。もう明るくしても爆弾がおちる心配はないのですから。

いつも家にいて、なにかと家族の世話をやきたがるムーミンパパですが、この

で、本屋さんにはおいてもらえず、ヘルシンキ駅の売店や新聞スタンドにならべられたといいます。それから四十六年もたって、文と絵はそのままに、ヤンソンさんの「序文」をつけて、こんどはふつうの本として出版されたのです。

　ヤンソンさんがこの物語を書きはじめたとき、ヨーロッパでは第二次大戦がはじまろうとしていました。ヤンソンさんの生まれた国フィンランドも戦争にまきこまれ、ドイツ軍に侵入されたり、ソ連（いまのロシア）の空爆をうけたりします。アトリエの窓ガラスも、爆弾でこなごなにふっとびました。これまでも手に入りにくかった石炭やバターや紙が、ますますとぼしくなりました。とぼしくなるのは物だけではありません。思うぞんぶん好きなことをしたり、嫌いなものは嫌いだといったり、なんにもしないでいる自由まで、なくなってしまったのです。

　しかたなくヤンソンさんは、戦争が好きなひとたちの似顔をおもしろおかしく

訳者あとがき

冨原眞弓

ずいぶん長いあいだ、ムーミンシリーズは八冊だと思われていました。じつをいうと、この『小さなトロールと大きな洪水』は、一九四五年に発行されたきり、そのまま絶版になっていたのです。書かれた順序としては、さいしょのムーミン物語になります。ところが、あらためて出版されたのが、シリーズが完結してから二十一年後の一九九一年だったために、ひろく知られるようになるのは、いちばんさいごになってしまいました。

もともとは、うすっぺらな表紙をいれても四十八ページにしかならない小冊子

こうして、いつまでも、いつまでも、みんなはこの谷に住みつづけました。
もっとも、気分をかえるために、なんどか遠出はしましたけれどね。



みんなは谷をかけおりて、うっとりと家をながめます。
スニフは屋根までよじのぼり、そこでいっそう声をはりあげました。だって、えんとつのところに、ほんものの大つぶの真珠のネックレスを見つけたのです。洪水で流されてきて、そこにひっかかったのでしょう。
「ぼくらは大金持ちだ！」
スニフはさけびます。
「車だって、もっと大きな家だって買えるよ！」
「いいえ。」
ムーミントロールのママはいいます。
「この家より美しい家はないわ。」
ママはムーミントロールの手をとって、空のように青い部屋へはいっていきました。


Tove

一日じゅう、みんなはあちらこちらと歩きまわりました。

そうしているうちに、とてもすてきなところにやってきました。雨あがりで、いたるところに目をみはるほどきれいな花がさき、どの木も花と実でおおわれています。ちょっと木をゆするだけで、実がおちてくるのです。

さいごに、みんなは小さな谷にやってきました。それまで見たどんなところよりも美しい谷です。その草地のまんなかに、タイルばりのストーブにそっくりの家がたっています。とてもすてきな青いペンキぬりの家です。

「わたしの家だ！」

ムーミントロールのパパはさけびました。もう、うれしくてたまりません。

「あの家はここまで流されてきて、こうしてちゃんとたっているじゃないか！」

「ヤッホー！」

スニフは大声でさけびます。

ブのことがわすれられなくてね。」

こうして、みんなは火をかこんで、それぞれの冒険をかたりあい、スープをのみます。

月がのぼり、浜べのたき火もつぎつぎに消えていきました。

みんなはアンコウからかりた一まいの毛布にもぐりこみ、ぴったりからだをよせあってねむりました。

つぎの日の朝、水はずいぶんひいていました。お日さまの光にてらされて、みんなはうきうきした気分ででかけました。おどりながら先頭をいくスニフは、うれしくって、しっぽをバラの花のようにむすんでいます。



ら、そのときはいつでもおいでください。歓迎しますよ。」
「どれくらい大きかったの?」
スニフがききます。
「部屋が三つあるんだよ。」
パパがいいます。
「空のような青い部屋、お日さまのような金色の部屋、それに水玉もようの部屋だ。屋根裏にはお客さん用の部屋もある。スニフ、きみのための部屋だよ。」
「その家はわたしたちと住もうと思ってたてたの?」
と、ママはうれしそうにききました。
「もちろんさ。」
パパはいいます。
「おまえたちをずっとさがしていたんだ、あちこちとね。あのなつかしいストー



まいあがっていきました。

「やあ、こんばんは。どうぞおすわりなさい。もうすぐスープができますよ。」

たき火をたいている二ひきのアンコウがいいました。

「ありがとうございます。」

ムーミントロールのパパはお礼をいって、話しはじめました。

「洪水のまえにわたしがどれほどすばらしい家をもっていたか、あなたがたには見当もつかないでしょうね。すべて自分でたてたのですよ。でも、またあたらしい家をたてますか

心をうごかされたコウノトリは、
「おっほん！」
と、口をはさみます。
「あんたがたを陸地にはこんでいってあげよう。そのあと、わたしはお日さまがしずむまで、もうすこし救助をつづけるとしよう。人だすけは、えらく気もちのいいものですな。」
コウノトリはみんなを浜べにはこんでいきます。そのあいだも、みんなは自分たちがくぐりぬけてきたおそろしいできごとを、口々にしゃべりあいました。
浜べのあちこちでは、たくさんの生きものが火をおこして、からだをあたため、食事をつくっています。たいていは、家をなくしたものたちです。
そんなたき火のそばに、コウノトリはムーミントロール、パパとママ、それからスニフをおろしました。そして、別れのあいさつもそこそこに、また水の上に

コウノトリが木の上にまいおりたときの、パパのおどろきとよろこびようといったらありません。しかも、家族のみんなが、えだの上をかけよってくるのです。

パパはもう、口もきけません。

「わたしたち、もう二度と、はなればなれにならないわね。」

ママはすすり泣きながら、パパをだきしめました。

「あなた、だいじょうぶ？　寒くないですか？　いままでどこにいたの？　あなたのたてたすばらしいおうちはどこにあるの？　わたしたちのこと、思い出していてくれた？」

「ほんとうにすばらしい家だったんだ。」

パパはいいます。

「息子よ、ずいぶん大きくなったなあ！」





「パパ！」

ムーミントロールも大声でさけびます。

いっしょになって、スニフもさけびます。

そうです。大きな木のいちばん高いえだの上に、びしょぬれのムーミントロールがしょんぼりとすわり、水をじいっと見つめているのです。そのそばで救助（きゅうじょ）をもとめる旗（はた）がひるがえっています。


Tove

し高度をさげます。

たくさんの生きものが、あちらこちらのえだの上にいます。でも、パパの姿はどこにも見あたりません。

「あのちびすけたちは、あとでたすけてやるとしよう。」

コウノトリはすっかり救助活動が気にいってしまったようです。

ずいぶんながいこと、コウノトリは、いったりきたり、水の上を飛びまわりました。

お日さまはかたむきはじめています。

パパは見つかりそうにありません。

とつぜん、ママがさけびました。

「パパよ！」

ママははげしく両手をふり、いきおいあまって、ころげおちそうになります。

ルは、大いばり、うれしくってたまりません。

「奥さん、捜索のおてつだいをいたしましょう。」

コウノトリはそういって、ムーミントロールのママにおじぎをします。

「さあ、わたしのせなかにおのりなさい。すぐさま出発しますよ。」

コウノトリは、まずママをせなかにのせ、それから、興奮してさわいでいるスニフをのせました。

「しっかりつかまって。水の上を飛びますからね。」

「こんなにすばらしいことは、はじめてですわ。」

ムーミントロールのママがいいます。

「飛ぶというのは、思っていたほどおそろしいことではありませんのね。さあ、みんな、しっかり目をこらして、パパを見つけるのよ！」

コウノトリは大きなカーブをえがいて飛び、木の上にさしかかるたびに、すこ



「おお、そうかい。なにをさがしているのかね？」

コウノトリはやさしい口調でたずねます。

「ぼくのパパだよ。どこかの木の上にいるはずなんだ。」

コウノトリはながいこと考えていましたが、それから口をひらきました。

「そいつは、おまえたちだけではうまくいかんだろう。わたしがてつだってやろう。メガネを見つけてくれたんだからな。」

コウノトリは、くちばしでムーミントロールをそっとくわえると、自分のせなかにのせました。

それから、つばさを一、二度はばたかせ、浜べの上にまいあがりました。

ムーミントロールは、いままで空を飛んだことがありません。ものすごくたのしくて、ほんのちょっぴりこわい経験でした。

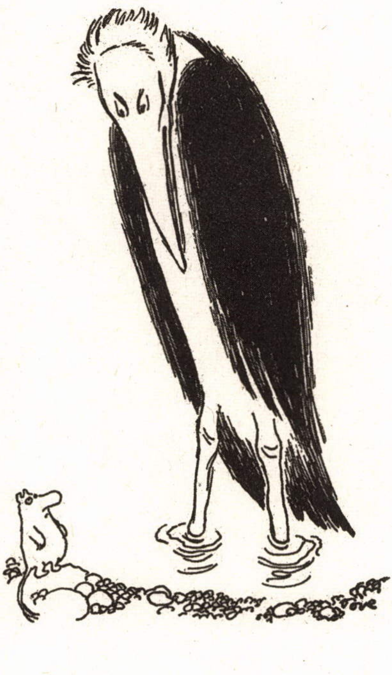
コウノトリのせなかにのって、ママとスニフのもとに到着したムーミントロー

「おーい、おーい！」
ムーミントロールはよびかけます。
「コウノトリのおじさん、メガネがあったよ！」
「まさか、ほんとうかい？」
コウノトリはほんとうにうれしそうです。
「おまえもそれほど役(やく)たたずのちびすけというわけでもないな。」
コウノトリはそういうと、メガネをかけて、あたりを見まわしました。
「ぼく、すぐいかなくちゃ。」
ムーミントロールがいいます。
「じつは、ぼくたちもさがしているんだ。」

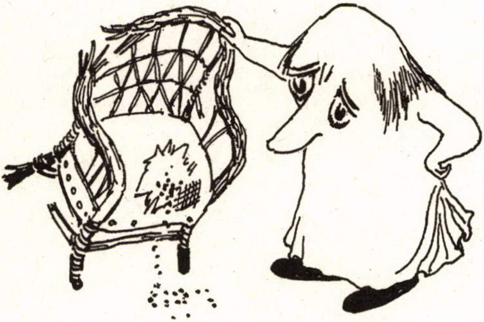


スニフがさけびます。
近よってみると、それはメガネでした。
「コウノトリのだ。ねえ、ママ、そう思わない？」
ムーミントロールがたずねます。
「そうね。」
ママはこたえます。
「走ってもどって、コウノトリにかえしてあげるといいわ。よろこんでくれるでしょう。でも、いそいでね。かわいそうなパパは、おなかをすかして、びしょぬれで、ひとりぼっちで、どこかにいるのよ。」
ムーミントロールは短い足をうごかして、いっしょうけんめいに走ります。とおくに、水の中に頭をつっこみ、メガネをさがしているコウノトリが見えました。

「あのコウノトリは、なにをなくしたのかなあ。ヘムルよりもっとおこっている
みたいだ。」
コウノトリはムーミントロールのことばをききとがめていいます。耳はいいの
ですね。
「おい、なまいきなちびすけ。おまえだって、百さいちかくになってメガネをな
くしたら、そんなにうきうきしているわけにはいかないだろうよ。」
そういうと、コウノトリは背をむけ、さがしつづけます。
「いらっしゃい。わたしたちはパパをさがさなくてはならないのよ。」
ママはムーミントロールとスニフの手をとって、足をはやめました。
しばらくいくうちに、水がひいたばかりの草のあいだに、なにか光るものがよ
こたわっているのを見つけました。
「ぜったいダイヤモンドだ！」



「おこらせちゃだめだよ。」
スニフがささやきます。
「かみつくかもしれないからね！」
「ばかばかしい！」
ママは平気です。
「さあ、いらっしゃい。」
びしょぬれのいすのシートをしらべているヘムルにはかまわず、みんなは浜べにそって歩きだしました。
「見て！」
ムーミントロールは、りっぱなコウノトリをゆびさしました。
コウノトリはうろうろと歩きまわって、なにやらつぶやいていています。



大きなヘムルがさけびました。
このヘムルは自分の家の食堂においてあった家具をあつめて、浜べにつみあげているところでした。
「どういうつもりだ。わたしの籐いすをボートがわりにのりまわすとは！」
「ほんとにけっこうなボートですこと！」
ママはおこって、浜べにおりたちます。
「こんなの、ほしくもないわ！」

ぼれてしまったのかもしれないわ！」
「泣かないで。」
ムーミントロールはママにいいます。
「もしかしたら、パパはこのすぐ近くの木にいるのかもしれない。それに、ほら、水がひいていくよ。」
ほんとうです。水かさはみるみるへっていきます。
あちらこちらで、丘や垣根や屋根が水の上にあらわれ、いまでは鳥たちも思いきりさえずっています。
籐いすはしずかにひとゆれして、小高い丘にのりあげました。
たくさんの生きものが右へ左へと走りまわり、自分のもちものを水からひっぱりあげています。
「おや、そいつはわたしの籐いすじゃないか。」

この手紙を発見してくださったかたへ。

どうかわたしをたすけてください！

わたしのすばらしい家は洪水で流されてしまいました。

わたしはひとりぼっちで、おなかをすかし、寒さにこごえ、

木の上にすわっています。

こうしているあいだにも水かさはふえるばかりです。

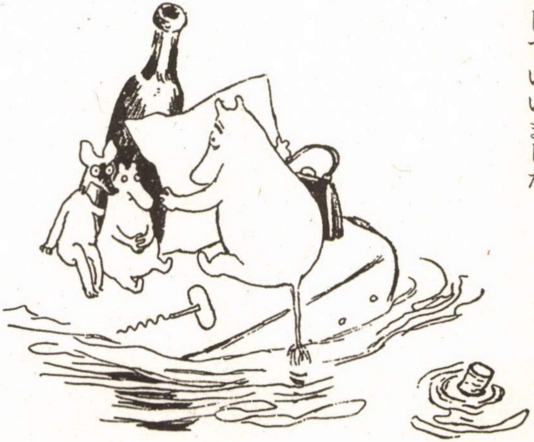
不運なムーミントロールより

「ひとりぼっちで、おなかをすかし、寒さにこごえている。」

ムーミントロールのママはそうつぶやいて、涙を流しました。

「ああ、かわいそうなわたしのぼうや。おまえのパパはもうとっくのむかしにお

スニフはしっぽでひきあげてみて、がっかりしていいました。
「おまけに、からっぽ。」
と、ムーミントロールもいいました。
「わからないの？」
ママはまじめな顔でいいます。
「これはとてもたいせつなものよ。手紙をはこぶビンなの。ほら、手紙がはいっているでしょう？」
ママはハンドバッグから、せんぬきをとりだし、ビンのコルクをぬきました。
ふるえる手で手紙をひざの上にひらき、読みあげます。



スニフはそういうと、いすの背もたれにはりついて、あたりを見まわします。こんなに大きな洪水のあとだから、高価なものが流れてくるにちがいないと考えたのです。たとえば、宝石がつまった小箱が見つかるかもしれません。ぜったいにない、とはいいきれませんものね。だから、スニフはいっしょうけんめい目をこらしました。

スニフがあっとさけび声をあげます。光るものが水にうかんでいるではありませんか。

「あっちへいこうよ！　なにかが流れていく。光るものだよ！」

「流れてくるものを、ぜんぶひろいあげているひまはないわ。」

ママはそういいましたが、それでも、いすの向きをかえます。なんといっても、とてもやさしいママですものね。

「なあんだ、ただの古いビンだ。」

ムーミントロールのママは、きっぱりといいました。
「さあ、また歩くのよ。水がひくまでまっていられないわ。みんな、籐いすにのりこんで。水の中におしだしますからね。」
「わたしはここにいるわ。」
ネコはそういって、あくびをします。
「むやみにいそぐ必要はありませんしね。地面がかわいてから、家にもどりますよ。」
お日さまの光にあたって、元気をとりもどしたのでしょう。五ひきの子ネコもきちんとすわりなおし、母ネコをみならって、あくびをしています。
ムーミントロールのママは、籐いすを岩の上からおしだしました。
「気をつけてね！」


TOVE

たことで、気まずい思いをしていたのですね。）
　でも、スニフのいったとおりです。
　雲がとぎれ、お日さまの光がひとすじ、またひとすじと、さしこみます。まもなく、どっとおしよせ流れる水面いっぱいに、お日さまがまばゆくふりそそぎはじめました。
「すごい！」
　ムーミントロールがさけびます。
「なにもかも、うまくいきそうだよ！」
　さあっと風がまきおこって、雲をおいはらい、雨にぬれて重たくなった木のえだをゆらします。荒れくるっていた水もしずまり、どこかで鳥が一羽さえずっています。
　ネコは日の光をあびて、のどをゴロゴロならしています。



母ネコは一ぴきずつ子ネコの首をくわえて、籐いすからはこびだし、一列にならばせます。からだをかわかさなくてはなりませんからね。

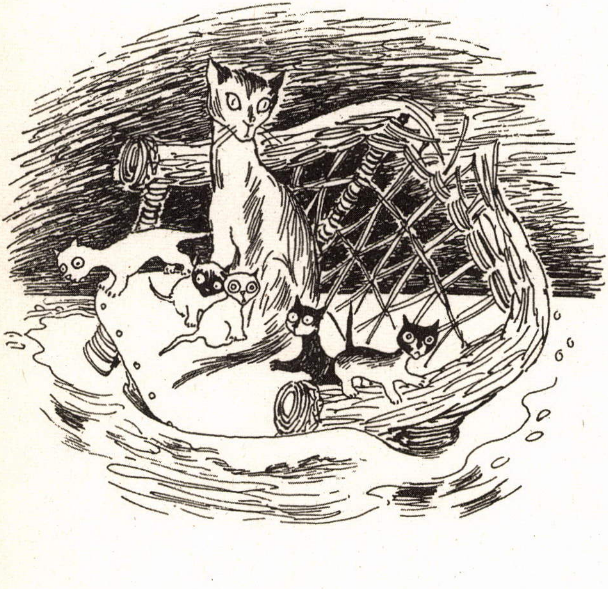
「ありがとうございました。こんなひどい嵐は、はじめてですよ。ニャンとも。」

ネコはそういって、子ネコをなめはじめました。

「もうすぐ嵐はおさまると思うな。」

スニフが口をはさみました。みんなの気をそらしたかったのです。（スニフは自分がこの救助活動の役にたてなかっ

にもできずにさわいでいるだけです。
すぐそばを籐いすが、ぐるぐるまわりながら流れていきます。ママは、あっというまに、しっぽのさきをそのひじかけにからませて、ぐいとひきよせます。
「さあ！」
と、ママ。
「よーし！」
ムーミントロールもさけびます。
「よいしょ、よいしょ！」
スニフもかけ声だけは元気です。
「手をはなしちゃだめよ！」
籐いすはゆっくりと向きをかえて、岩に近づいてきました。ちょうどそのとき、うまいぐあいに波がうちよせて、いすを岩の上におしあげました。



しぎなものを見ていたのです。
「遭難者だ！」
目のいいムーミントロールがさけびました。
「一家そろってだ！　ママ、たすけなくちゃ！」
布ばりの籐いすがゆれながら近づいてきます。水の上にでているえだのさきにひっかかることもありますが、すぐに水のうずにまきこまれて、えだからはなれ、おし流されていきます。いすの上には、びっしょりぬれた母ネコと、同じようにびしょぬれの五ひきの子ネコがいます。
「かわいそうなお母さん！」
ママはそうさけぶと、流れにとびこみました。水は腰の高さまであります。
「わたしをつかまえていて！　しっぽであのネコたちをひきよせるから。」
ムーミントロールはママをしっかりつかまえます。スニフは興奮しすぎて、な

こしばかりのイチジクの実ぐらいしかありません。

三日めになると、いままでになかったほどの大雨になり、小川はみな、白くあわだつ大きな川に姿をかえてしまいました。

前にすすむことがむずかしくなってきました。水かさはふえる一方です。流れにのみこまれないために、しまいには、小さな岩によじのぼらなければならなくなりました。

ごうごうとうずまく水がせまってくるのを見つめているうち、からだはこごえてきます。家具や家や大きな木が、洪水のうずにまきこまれて流されていきます。

「ぼく、やっぱりうちにかえる！」

スニフがわめきます。でもだれも、きいていません。

ムーミントロールとママは、水の中をおどるように流されていく、なにやらふ

「しかたがないわ。とにかく歩きつづけましょう。」
ムーミントロールのママがいいました。
「こういうこともあろうかと、とっておいたものがあるの。おたべなさい。」
ママはそういうと、ハンドバッグから大きなチョコレートをとりだしました。あの年とった男の人のふしぎな庭からとってきたものです。ママはチョコレートを二つにわり、ムーミントロールとスニフにわたしました。
「ママはなにもたべないの？」
ムーミントロールがききます。
「わたしはチョコレートがきらいなのよ。」

こうして、みんなはどしゃぶりの雨の中を、一日じゅう、つぎの日もまた一日じゅう、旅をつづけました。たべるものといったら、雨にぬれたヤマイモや、す


TOVE

テンのかげで、ひと休みしたくなってしまいます。でも、ママはパパの足どりがつかめるまでは、ゆっくりと休む気にはなれません。
日がかげりだしても、ただひたすら、まっすぐ南をめざして歩きつづけます。
とつぜん、スニフがたちどまって、耳をそばだてました。
「ぼくらのまわりでカサコソ音をたてているのはなんだろう?」
きこえてきました。葉っぱのあいだでささやくようなかすかな音です。
「ただの雨よ。」
ムーミントロールのママがいいます。
「とりあえずサボテンの下にもぐりこみましょう。」
ひと晩じゅう、雨はふりつづきました。
翌朝は、どしゃぶりの雨。見わたすかぎり、すべてが灰色にくすみ、ゆううつな感じがします。

「幹がひょろりと長くて、てっぺんにちょっぴり葉っぱがついているだけだなんて。ばかみたいな木だなあ。」

「おばかさんなのは、あなたのほうよ。」

ムーミントロールのママはいいました。そんないいかたをするのは、いらいらしているせいです。

「これはヤシの木よ。むかしから、こういうかたちをしているの。」

「そんなのどうでもいいよ。」

スニフは、むっとしていいかえしました。

夕がた近くなると、ずいぶん暑くなってきました。草木は頭をたれ、お日さまはうす気味わるい赤い色で、じりじりとてりつけます。

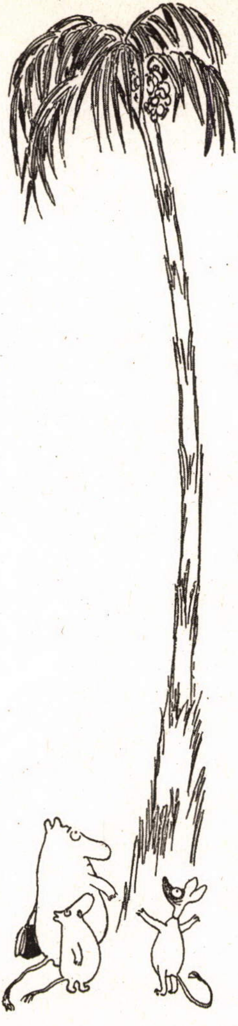
もともとムーミントロールという生きものは、あたたかいのが大すきなのですが、さすがにこの暑さにはげんなりです。そこらじゅうにはえている大きなサボ

つづけることになりました。

一日じゅう、みんなは花がさきみだれる野原を歩きつづけました。ムーミントロールはできることなら、ゆっくり探検したいと思いましたが、ママはさきをいそいでいて、たちどまることもゆるしてくれません。

「あっ、すごくへんな木だ。こんなの見たことあるかい？」

スニフがたずねます。



チューリッパはまよわずこたえました。とてもうれしそうです。
「あなたのガラスの塔でずっと考えていたの。ここで海の旅人のために、わたしの髪を光らせることができればいいなって。それに、海のプディングはわたしのとくい料理なの。」
そういったあとで、チューリッパはすこし心配そうにママを見て、つけくわえました。
「もちろん、パパをさがすおてつだいをしたいという気もちも……。」
「いいえ、だいじょうぶ。わたしたちだけでなんとかやっていけるわ。」
と、チューリッパをさえぎって、ママがいいます。
「あなたたちふたりに手紙をかきますよ。どうなったかを知らせるためにね。」
そこで、みんなはだきあって、さようならをいいました。
こうして、ムーミントロールはママとスニフといっしょに、南をめざして旅を

ムーミントロールのママは、その場でそわそわと足ぶみしながら、あやまります。

「でも、わかってくださるわよね……。」

「そうじゃありません。」

少年は髪(かみ)の毛(け)と同じくらいまっ赤(か)になって、くちごもります。

「あの、ぼく、考えたんですけど。つまりその、ひょっとして……。」

「はっきりいってごらんなさいな。」

ママはいいました。

「ねえ、チューリッパ。」

少年はいいます。

「すてきなチューリッパ。ここにとどまる気はありませんか?」

「よろこんで。」

「そのムーミントロールは、どちらの方角へいきました？」
ママはたずねます。
「なにかいってました？　どこにいるのかしら？　元気そうでした？」
「元気そうでしたよ。そうですね、南のほうへいきましたよ。」
「じゃ、すぐおいかけましょう。おいつけるかもしれないわ。いそぐのよ、みんな。ハンドバッグはどこかしら？」
ママはそういうと、みんながついていけないほどのスピードで、らせん階段をかけおりました。

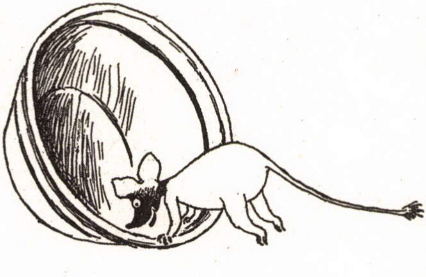
「まってください。ちょっとまってくださいよ！」
げんかんのとびらのところでみんなにおいつくと、少年はいいました。
「ごめんなさいね。きちんとさようならもいわないで。」

「このあいだの月曜日の台風のあとに。」
「それ、まさかパパじゃないよね！」
ムーミントロールがさけびます。
「そのムーミントロールは、しっぽをポケットにいれるくせがあった？」
「そういえば、そんなくせがあったなあ。よくおぼえていますよ。たのしそうに見えましたからね。」
ムーミントロールとママはうれしくって、うれしくって、ひしとだきあいます。スニフはとびはねながら、やった、すごいや、とさけびました。



ブルの下にもっていって、すっかりなめてきれいにしました。)
「ごちそうさまでした。」
ムーミントロールのママはいいます。
「さぞかしいろんなかたに、ここで海のプディングをごちそうなさったのでしょうね。」
「ええ、そうですね。世界じゅうから、いろんな生きものがここをおとずれましたよ。スナフキン、海のおばけ、小さな生きもの、大きな生きもの、スノーク、ヘムル、といろいろです。アンコウがお客になったこともあります。」
「ひょっとして、ムーミントロールを見かけたことはありませんか?」
ムーミントロールのママがたずねました。興奮して、声がふるえています。
「そう、いちど会いましたよ。」
少年がこたえます。

「ほんとうに、わたしたちのためのものなんですか?」
ママがたずねました。
「もちろんですとも。」
少年はいいます。
「海が嵐になると、ぼくは見はりにたちます。そして、この港にたどりついたみなさんに、海のプディングをごちそうするのです。いつでもそうなのですよ。」
みんなはテーブルをかこんですわり、あっというまに、おさらをからっぽにしてしまいました。(いつもお行儀がいいとはかぎらないスニフは、おさらをテー





ママがこたえます。

「おなかがすいていることはたしかですけれどね。」

少年はとびらをひろくあけて、いいました。

「どうぞ、おはいりください。」

少年はチューリッパを見ると、ふかぶかとおじぎをしました。こんなに美しい青い髪は見たことがなかったのです。チューリッパも同じようにおじぎをしました。少年の赤い髪をうっとりするほどすばらしいと思ったのです。

みんなは少年のあとから、らせん階段をのぼり、塔のいちばん上のガラスばりの階につきました。そこからすべての方向に海が見わたせるのです。部屋のまんなかにあるテーブルには、ほかほかゆげのたっている海のプディングを盛った大きな深ざらがおいてあります。



スニフとチューリッパもいいます。
みんなはそろって、ムーミントロールのママをじっと見つめました。
「ふう、しかたがないわね。」
ママは塔の前にいき、とびらをたたきます。
しばらくして、とびらのまどがひらき、まっ赤な髪の少年が顔をのぞかせました。
「遭難なさったのですか？」
少年はたずねました。
「まあ、そういうところでしょうか。」

「見て、ほんものの黄金の家だ！」
とつぜん、スニフがさけびました。
スニフがゆびさしたのは、野原のまんなかにある塔です。ずらりとならぶまどがお日さまの光にかがやいています。いちばん上の階はガラスづくりで、そこに光があたって、もえるような赤い金色に見えます。
「だれが住んでいるのかしら？」
ムーミントロールのママがいいます。
「朝はやくからおこすのは、気のどくね。」
「でも、ぼくはおなかがぺこぺこだよ。」
ムーミントロールがいいます。
「ぼくも。」
「わたしも。」

ねいにおじぎをしました。
でも、みんなが頭をあげたときには、ニョロニョロのかげもかたちもありません。
「姿を見えなくしてしまったんだ。」
スニフがいいます。
「かわった連中だなあ。」

みんなは花ざかりの野原に足をふみいれます。ちょうどお日さまがのぼりはじめ、朝露の中ですべてがきらきらとかがやいています。
「こんなところに住みたいわ。」
チューリッパがいいます。
「ここの花は、わたしの住みかだったチューリップよりもずっときれい。それに、わたしの髪とあのチューリップとでは色があわなかったもの。」

ボートは野の花がさきみだれる原っぱのそばにつきました。ムーミントロールは、もやい綱をもって、とびおりました。

「おじぎをして、ニョロニョロたちにお礼をいいなさい。」

ママがいいます。

ムーミントロールはふかぶかとおじぎをし、スニフもお礼のしるしに、しっぽをふってみせます。

「ほんとうにありがとう。」

ムーミントロールのママとチューリッパはそういって、頭が地面にくっつくほど、てい



「すてきなところね。」
「ものは考えようさ。」
海のトロールはいいます。
「ぼくは海が荒れているときのほうがすきだな。波がおさまらないうちに、海にもどるよ。」
海のトロールはそういうと、ちゅうがえりをして、海の中に消えてしまいました。

ニョロニョロたちは、目の前に知らない島があることに気づくと、とつぜん生き生きとしてきました。風でたるんだ帆をまきあげようとするニョロニョロもいれば、花ざかりのみどりの浜べをめざして、いっしょうけんめいにオールでこぎはじめるニョロニョロもいます。

「どんなものでもあるさ。」

海のトロールがいいます。

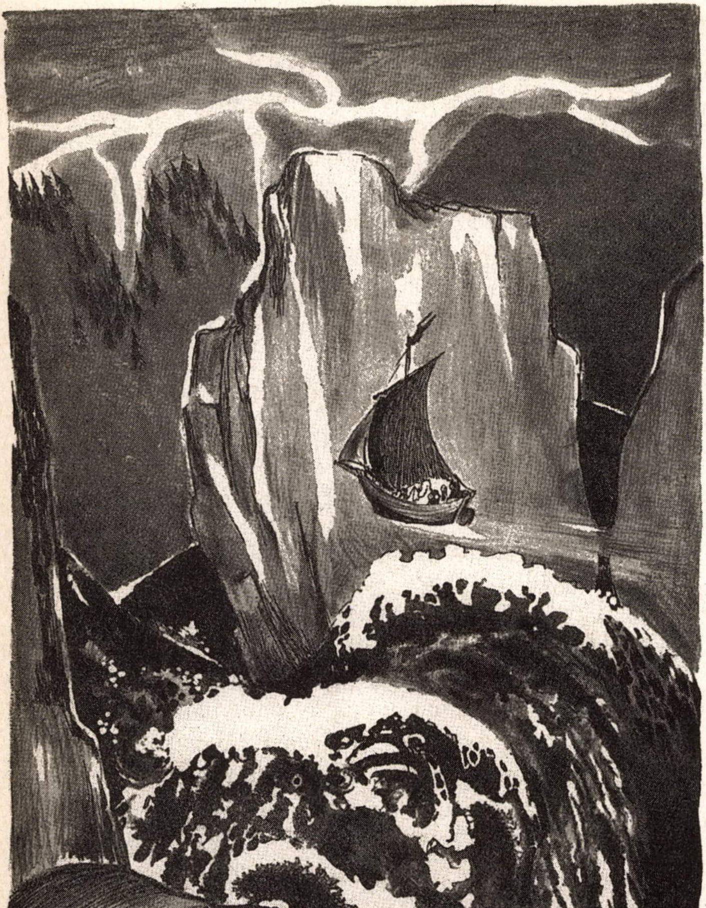
「さあ、しっかりつかまって。港にはいっていくよ！」

その瞬間、ボートは黒いさけめにすべりこみました。けわしい岩壁のはざまで、嵐がほえるように荒れくるい、海が白い波しぶきをあげて岩にぶちあたっています。ボートはこのまま岩にぶつかってしまうのでしょうか。

いいえ、ボートは鳥のようにかろやかに波の上をすべり、大きな港にすうっとはいっていきました。すきとおった水は、まるでサンゴ礁の中のように、みどり色でおだやかです。

「たすかったわ！」

ムーミントロールのママはいいました。じつをいうと、海のトロールをあまり信用していなかったのです。


TOVE

「ぼく、いい港を知っているよ。」
海のトロールがいいます。
「ただ、入り口がせまいから、ぼくみたいにうでのいい船乗りでないと、うまくいかないけどね。」
海のトロールは大きな声でわらい、ボートをじょうずにあやつって、波の上をぐーんとジャンプさせました。
そのとき、矢のように走るいなずまにてらされて、海の中から陸地が姿をあらわしました。
(ずいぶん荒れはてて、うす気味のわるいところだわ。)
と、ムーミントロールのママは思いました。
「そこには、なにかたべるものがあるかしら?」
ママはたずねます。

「そういうことなら、ぼくがしばらく舵をあずかるよ。」
海のトロールがいいます。
「このままの航路でいくと、まっすぐ外海にでてしまうからね。」
海のトロールは舵をとっていたニョロニョロをおしのけて、ボートをジグザグに走らせはじめました。ふしぎなことに、海のトロールがのったとたんに、航海がすんなりいくようになりました。ボートはおどるようにすすみ、ときには波のてっぺんをジャンプすることもあります。
スニフも元気になってきたようです。ムーミントロールはうれしくて、大声でさけびます。でもニョロニョロのようすはかわりません。あいかわらずじっと水平線を見つめているだけ。知らない土地から知らない土地へと、どこまでも、どこまでも、旅をつづけることにしか興味がないのです。

ムーミントロールはていねいにこたえます。（じつをいうと、ずいぶんむちゃをいうなあとは思ったのです。なんといってもムーミントロールは、海のトロールよりもずっと上品な生きものなんですからね。）

「ボートにおのりなさいよ。いつまでもそうしてはいられないでしょ。」

チューリッパが海のトロールに大声でいいました。

海のトロールはボートのはしっこにとびのり、イヌのようにからだをふるわせて、水をふりはらいました。

「ひどい天気だね。」

海のトロールはいいました。

「きみたち、どこへいくの？」

「どこだっていいよ。陸地につきさえすれば。」

スニフはなさけない声でいいます。その顔は船酔いでまっ青です。



ている海のトロールの姿(すがた)が、いなずまの光にうかびあがります。

「やあ、きみ。」

ムーミントロールは嵐(あらし)の中からよびかけました。こわがってなんかいないぞ、というところを見せたかったのです。

「やあ。」

海のトロールも返事(へんじ)をします。

「きみはぼくらの親類(しんるい)かもしれないね。」

「そうだといいねえ。」



ムーミントロールは、もうそれ以上なんにもいう気にならず、ママのそばにはっていってよりそいました。

ときどき、とてつもない大波がおしよせ、ボートのへさきを水びたしにします。

ボートは帆をぴんとはって、ものすごいスピードで海の上をすべっていきます。波間をおどりながらボートとすれちがう人魚や、小さな海のトロールの群れが、ちらりと姿を見せたりもします。

雷はますますはげしくなり、ぴかり、ぴかりと、いなずまが空に走ります。

「ぼく、船に酔っちゃったよ。」

スニフは、ムーミントロールのママに頭をおさえてもらって、はきはじめました。

もう、とっくにお日さまはしずんでいますが、ボートにならんでおよごうとし

さあ、みんな、ボートにとびのって！」

「わかった。だけど、ぼくは知らないよ。」

スニフはぶつぶついいます。でもとにかく、さいごにボートにのりこみました。

ニョロニョロのひとりが舵をとり、ボートは外海へとむかいます。

空はみるみる暗くなり、海には白い波頭がたち、とおくで雷がなっています。チューリッパの髪が風にふかれ、心ぼそげに光っています。

「ぼく、こわいよ。」

スニフはいいます。

「きみたちといっしょになんか、くるんじゃなかった。」

「なんだよ。」

「あわてていたので、ニョロニョロは口もきけないし耳もきこえないということを、すっかりわすれていたわ。」

そこで、ママは砂の上にハンサムなムーミントロールの絵をかき、大きなクエスチョンマークをつけました。

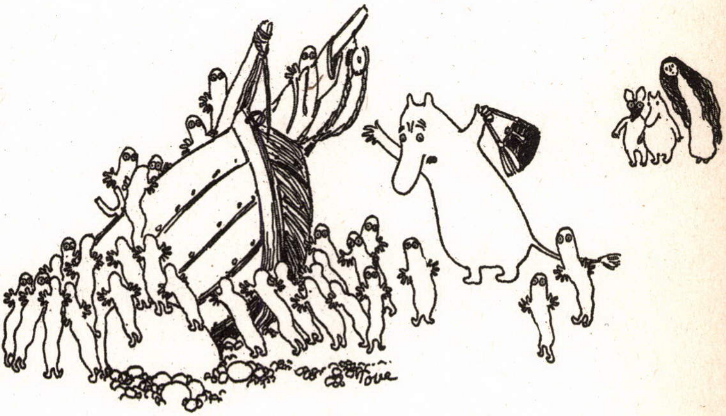
でも、ニョロニョロは気にもとめず、海にボートをうかべ、帆をあげようとしています。(ママの質問の意味がわからなかったのでしょうか。ニョロニョロはあまりかしこくありませんからね。)

黒雲がむくむくともりあがり、海には波がたちはじめました。

「かれらについていくしかないでしょうね。」

ムーミントロールのママは、かくごをきめていいました。

「浜べは陰気でさびしいし、べつのアリジゴクにでくわすというのもいやだわ。


Tove

白い生きものたちが、帆をはったボートをだそうとしているのです。

ムーミントロールのママはじっと見ていましたが、大声でさけびました。

「あれは放浪者たちよ！　ニョロニョロだわ！」

ママは全速力でニョロニョロのほうへ走りだしました。

ムーミントロールとスニフとチューリッパがかけつけたときには、ママはニョロニョロたち（やっとママの腰くらいの身長です）のまんなかにたって、話しかけたり、質問したり、手をふったりと、なにやらとても興奮しているようです。

ムーミントロールのパパを見かけなかったかと、なんども、なんども、たずねているのです。でもニョロニョロたちは、その色のないまるい目でママをちらっと見るだけで、ボートを海におしだすのにかかりきりです。

「あっ。」

と、ママは大声をあげました。

りだしました。
ママはたすかったのです。
（アリジゴクは、ただもう、はらだちまぎれに砂をほりつづけています。いったい、いつになったら上にあがってくるのでしょうね。）

ママの目の中の砂をとりのぞき、ひと息つくまでには、それからずいぶんと時間がかかりました。
およぎたいという気もちがすっかり消えうせてしまったみんなは、どこかにボートがないかと、海べを見てまわることにしました。もう太陽はかたむきはじめ、水平線のむこうでは、おそろしい黒雲がわいています。嵐になりそうです。

ふと見ると、とおくの浜べでなにかがうごめいています。たくさんの小さな青

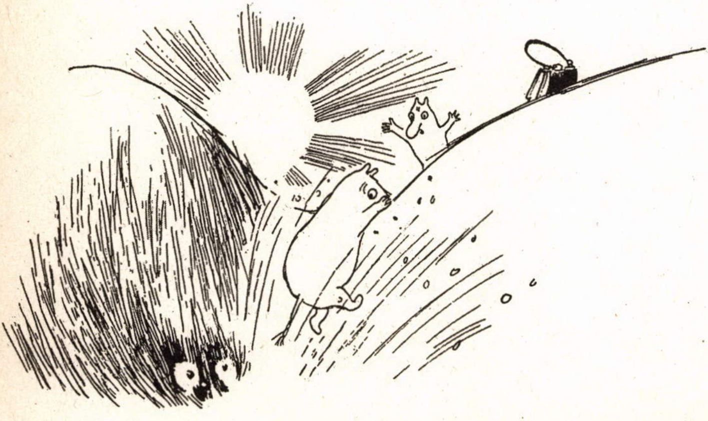
「だれか、たすけて！」

　ムーミントロールはママの声をききつけ、水からとびでてかけつけました。

　まにあいました。

　ムーミントロールはママの耳をつかみ、全身の力をこめてひっぱりあげながら、アリジゴクに悪口をあびせます。

　スニフとチューリッパもたすけにかけつけ、やっとみんなでママをあなの外にひっぱ





が見えなくなってしまいました。アリジゴクはぐんぐん近づいてきたかと思うと、いきなり砂にあなをほって、もぐりはじめました。あなは、どんどん深くなっていきます。いまやあなの奥のほうで、目がのぞいているだけです。そうしているあいだも、ママにせっせと砂をかけるのです。あなの中にずるずるとすべりおちはじめたママは、必死にはいあがろうとします。

「たすけて！」

ママはさけび、砂をペッペッとはきだします。



そこへとつぜん、アリジゴクが姿をあらわしました。浜べをさんぽしていたのです。アリジゴクは、かんかんにおこっているようです。

「ここはおれの浜べだ！　でていけ！」

「おあいにくさま。」

ムーミントロールのママはいいかえします。

「そうか、そっちがその気なら。」

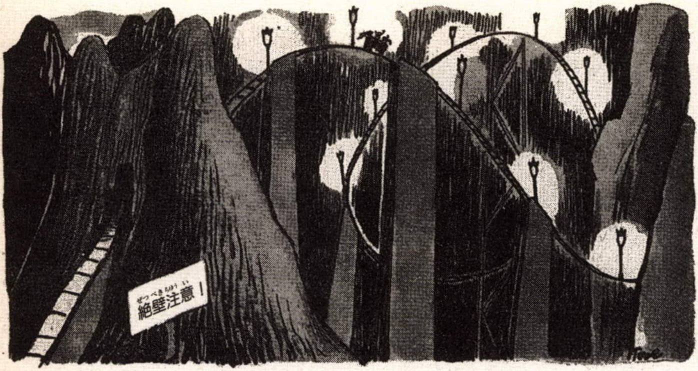
というと、アリジゴクはママの目に砂をひっかけはじめました。砂をけちらし、かきだし、たいへんな勢いです。とうとうママは目

「あんまりながく水の中にいてはいけませんよ！」
ムーミントロールのママは大きな声でさけび、日光浴をしようとよこになりました。まだとても疲れていたのです。



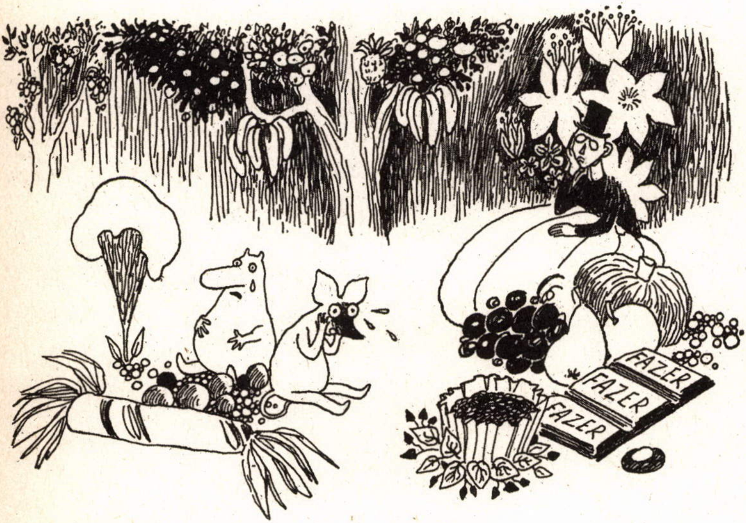
のって、岩山をものすごいスピードでぶんぶんかけぬけました。おかげで、山のむこうがわについたときには、すっかり目がまわってしまいました。地べたにすわりこみ、ずいぶんしてから、ようやくひと息ついて、あたりを見まわしました。
目の前には大きな海がひろがり、お日さまにきらきらと光っています。
「およぎたいな！」
ムーミントロールはさけびました。もうすっかり元気になったのです。
「ぼくも！」
スニフもいいました。
ふたりは水の上にきらめくお日さまの光をめがけて、まっすぐに走っていきました。チューリッパも髪がばらばらにならないよう、頭の上にまとめて、そろそろと水にはいります。
「つめたい！」


TOVE



「ありがとう。そうします。」
それから、ママはいいました。
「では、さようなら。」
「さようなら。」
と、チューリッパもいいます。（ムーミントロールとスニフはなにもいえません。ふたりとも気もちがわるくて、それどころではなかったのです。）
「どういたしまして。」
と、年とった男の人はいいました。
こうして、みんなはジェットコースターに

よ。」
　年とった男の人は、かなしそうにいいます。
「あんたたちがここを気にいらないのは、じつにこまったものだ。」
「また、きますわ。」
　ムーミントロールのママは、年とった男の人をなぐさめました。
「いまはともかく、きれいな空気のあるところにでなくてはね。」
　そういってママは、一方の手でムーミントロールの手を、もう一方の手でスニフの手をとり、チューリッパをよびました。
「いちばんいいのは、ジェットコースターでしょうな。」
　年とった男の人は親切にいいます。
「岩山をまっすぐよこぎっていけば、お日さまの光のどまんなかにでられるからね。」


FAZER
FAZER
FAZER

まんまるになったムーミントロールが、痛さにのたうちまわっています。

となりのスニフはと見ると、キャンディのたべすぎで歯が痛くなり、ムーミントロールよりもっと大声でわめいています。

ムーミントロールのママはしかったりしないで、ハンドバッグからこなぐすりを二つだして、ムーミントロールとスニフにのませ、年とった男の人に、

「おいしくてあたたかいおかゆの池はありませんか?」

と、たずねました。

「気のどくだが、そういうものはないんだよ。ホイップクリームやマーマレードの池ならあるんだがね。」

「そうですか。でも、おわかりでしょう。あの子たちに必要なのは、ちゃんとした、あたたかいたべものなんです。ところで、チューリッパはどこかしら?」

「あの子は、お日さまがぜんぜんしずまないので、ねむれないといっているんだ



ちは旅をつづけなければなりません。ほんもののお日さまの光のもとで、自分たちで家をたてようと思っているのです。」
「そんなの！　ここにいようよ！」
ムーミントロールとスニフとチューリッパは、声をそろえてさけびました。
「いいえ、子どもたち。」
ムーミントロールのママはいいました。
「あなたたちにも、そのうちわかりますよ。」
それからママは、チョコレートの木の下で、ひとねむりしました。

しばらくしてママが目をさますと、泣きわめく声がきこえてきます。ママにはすぐにわかりました。ムーミントロールがおなかをこわしたのです。（ムーミントロールという生きものは、すぐにおなかをこわすのです。）たらふくたべて、

「ふん。これよりいいものはつくれんよ。」
年とった男の人は気をわるくして、いいました。
「だが、庭（にわ）のほうは気にいってくれたろう？」
「うん、とっても。」
と、ムーミントロールはいいました。ちょうど小石をたべているところだったのです。（ほんとうはアーモンドの菓子（かし）パンなのですけれどね。）
「あんたたちがここにいるつもりなら、シュークリームの家をつくってあげるよ。」
年とった男の人がいいます。
「いつもひとりだと、ときにはたいくつするんでね。」
ムーミントロールのママはこたえました。
「ご親切ありがとうございます。でも、わるく思わないでくださいね。わたした

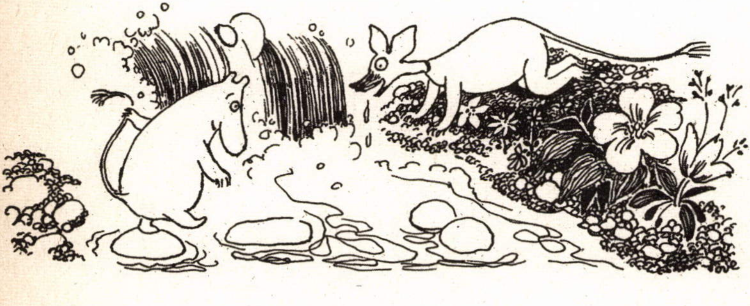
は、つむそばから、すぐにあたらしくはえてくるのです。
みんなは自分たちのかなしい身の上をわすれて、魔法の庭の奥へ奥へと、はいっていきました。
年とった男の人は、あとからゆっくりついてきて、みんながおどろいたり感心したりするようすを、満足そうに見ています。
「ここにあるものはみんな、わたしがつくったんだよ。そう、お日さまもね。」
たしかに、よく見ると、ほんもののお日さまではなくて、黄色い紙のフリルがついた大きなランプです。
「なあんだ。」
スニフはがっかりして、いいました。
「ほんものだと思ってたのになあ。そういえば、ちょっと光りかたがへんだよね。」

水をのもうとかがみこんだスニフが、さけびました。

「これは水じゃない。レモネードだ！」

ムーミントロールのママは、まよわずまっ白な小川にいきました。ミルクが大すきなのです。（ムーミントロールという生きものは、たいていミルクが好物です。すくなくとも、ちょっぴり年をとってくるとね。）

チューリッパは、えだからえだへと、両うでいっぱいにチョコレートやキャンディの実をつみました。きらきら光る実



木はいろんな色にかがやき、いままで見たこともないような実や花が、いっぱいついています。足もとの草には、白い雪の結晶がきらきら光っています。

「すごい！」

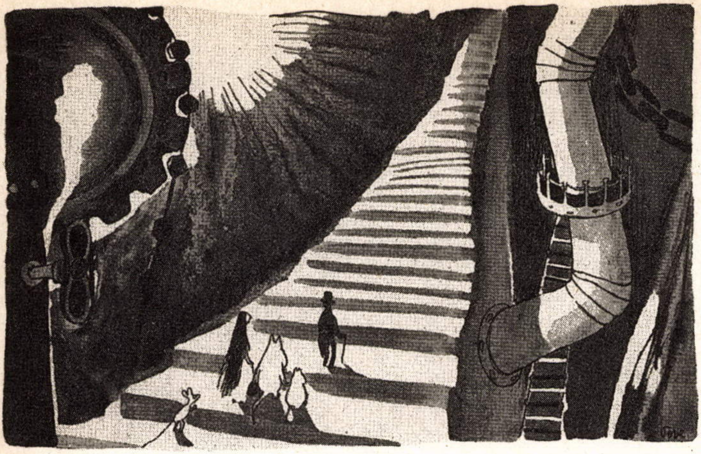
ムーミントロールはさけんで、かけだしました。雪玉をつくるのです。

「気をつけて。雪はつめたいのよ！」

ママが声をかけました。

ところが、ムーミントロールは、両手ですくいあげようとして、それが雪ではなくてアイスクリームだということに気づきました。足の下できしきしとくずれるみどり色の草は、こまかいつぶの、ねじり砂糖でできています。野原のあちらこちらで、色とりどりの小川が、ふつふつと小さな声でつぶやきながら、黄色の砂の上を流れています。

「みどり色のレモネードだ！」



みんなはエスカレーターにのり、まっすぐ岩山の奥へと、はこばれていきます。

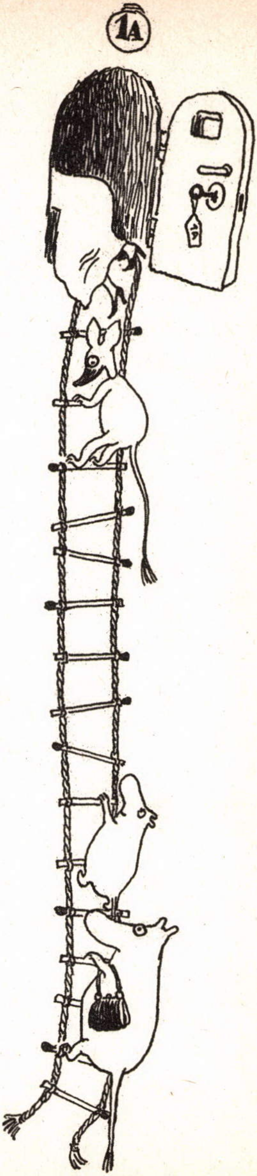
「あの人、信用できると思う?」

スニフがささやきます。

「わすれないでよ。きみたちの身が、あぶないんだからね。」

スニフはできるだけ小さくちぢこまって、ママのかげにかくれることにしました。

まばゆい光にてらされて、エスカレーターにのったみんなの前に、すばらしい景色がひらけていきます。



なわばしごをのぼるのはたいへんでした。とくに、ムーミントロールとママにとってはね。なにしろ足がとても短いのですから。

「さあ、足をふきなさい。」

年とった男の人はそういって、なわばしごをひきあげました。それからとびらをきっちりとしめました。危険なものが、はいりこんではいけないからです。

「どうしたんだ？」

「すみません。」

と、チューリッパは頭をさげました。

「でも、ほんとうにかなしいことばかりなのです。ムーミントロールのパパはどこかへいってしまいました。わたしたちは寒さにこごえ、お日さまの光をあびたいと思っても、この岩山をこえられずにいます。おまけに、住むところもないんです。」

「なるほど。」

年とった男の人はいいました。

「それでは、ここにのぼってきなさい。わたしのところにあるお日さまの光は、どこよりもすばらしいものなんだよ。」

みんなはぴたりと泣くのをやめて、あたりを見まわしました。でも、声の主は
どこにも見あたりません。
そこへ、一本のなわばしごが、岩山の壁づたいにするするとおりてきました。
はるか上のほうで、年とった男の人が、岩のとびらから頭をだしました。



と、チューリッパがいいました。

「もちろんよ。」

と、ママ。

「でも、たぶん会えないでしょうね。」

そういって、ママは涙をぬぐいました。

みんなもかなしくなって、すすり泣きをはじめました。泣いているうちに、ほかにもいろいろかなしいことが思いだされて、ますます泣けてきます。

チューリッパの髪はかなしみのあまり、かがやきをうしない、にぶい色になってしまいました。

こうしてみんなは、ながいあいだ泣きつづけました。

「そこでなにをさわいでいるんだ?」

とつぜん、どなり声がしました。

まりかえった夕ぐれに、ニョロニョロたちの歩きまわる音がきこえたりする。でも、たいていは世界じゅうを放浪していて、どこにもおちつくことはないし、なにひとつまわりのことに関心をもたない。ニョロニョロがよろこんでいるのか、おこっているのか、かなしんでいるのか、おどろいているのか、だれにもわからないのよ。感情というものがまったくないんじゃないかしら。」

「それじゃあ、パパもニョロニョロになってしまったの?」

ムーミントロールはききました。

「まさか、とんでもない!」

ママはいいます。

「わかるでしょう? ニョロニョロがパパをだまして、つれていってしまったのよ。」

「ねえ、いつかわたしたちと会えたら、パパはよろこんでくれるかしら?」

「パパのこと、なにか話してよ。」
ムーミントロールがたのみました。
「ありきたりのムーミントロールではなかったわ。」
ママは考えこみながら、かなしそうにいいました。
「パパはいつでもどこかへいきたいと思っていたの。ストーブからストーブへと転々とね。どうしても満足できなくて、ある日、いなくなってしまったの。あの小さな放浪者、ニョロニョロたちといっしょに旅にでてしまったのよ。」
「それ、どういう生きものなの？」
スニフがたずねました。
「小さなトロールのおばけみたいなものよ。」
ママは説明します。
「ふだんは目に見えないの。人間の家の床下にいることもあって、あたりがしず

「まだそこに住んでいるムーミントロールたちもいるのよ。」

ママはいいます。

「もちろん、ちゃんとしたストーブがあればの話だけれどね。セントラルヒーティングの暖房は、いごこちがよくないから。」

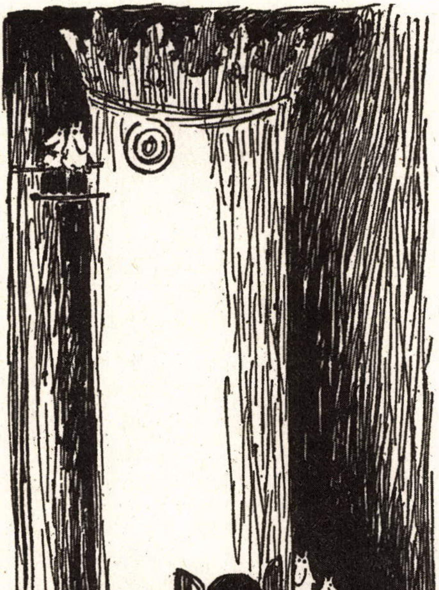
「ぼくたちがそこに住んでいたことを、人間たちは知っていたのかな?」

ムーミントロールがたずねます。

「知っていた人もいるわ。」

ママはいいました。

「人間はわたしたちのことを、ときどき首すじにふうっとふきつける、つめたいすきま風のようなものだと思っていたわ。ひとりでいるときなんかに、そう感じたようね。」



ママがいいます。
「かぜをひいたようね。ここにおすわりなさい。火をおこしましょう。」
ママは、かれえだをあつめて大きな山をつくり、チューリッパの青い髪の毛から火花をもらって、火をおこしました。

みんなはすわって火を見つめながら、ムーミントロールのママの話に耳をかたむけます。
ママは自分の子どものころのこと、ムーミントロールたちが住むところをさがして、おそろしい森や沼を旅しなくてもよかったころの話をはじめました。
そのころはムーミントロールたちも、ほかの家住みトロールたちといっしょに、人間の家に住んでいたのです。たいていは、タイルばりの大きなストーブのうしろにね。

つぎの日の朝、チューリッパが先頭にたって歩きました。その青い髪の毛は、とっても明るいお日さまのランプのように、まばゆくかがやきます。

道はだんだんけわしいのぼり坂になり、そのさきは、まっすぐきりたった岩山へとつづいています。その岩山ときたら、とても高くて、てっぺんは見えないほどです。

「あそこにいけば、お日さまの光があるんだろうなあ。」

スニフはうっとりと夢見るようにいいます。

「ここは寒いね。ぼく、こごえそうだ。」

「ぼくも。」

ムーミントロールもそういって、くしゃみをしました。

「思ったとおりだわ。」



はずかしそうにスニフがたずねます。
「この花はわたしの家なの。わたしのことを、チューリッパとよんでくださいな。」
少女はそうこたえました。
さて、みんなはゆっくりとボートをこいで、沼のむこう岸にたどりつきました。
そこにはシダがびっしりはえています。ママは、シダのしげみのかげに、コケのねどこをこしらえました。
ムーミントロールはママにくっついて、沼でないているカエルの歌をきいています。夜はさびしくふしぎな物音がいっぱいで、ねむりにつくにはずいぶん時間がかかりました。

チューリップの光は、ますます明るくなっていきます。
ヘビはまばたきをしはじめ、そのうち、ぷいと向きをかえると、ふきげんに音をたてながら、どろの中にもぐってしまいました。
ムーミントロールもママもスニフも、びっくりぎょうてん、ながいこと、口もきけません。
ようやくママは、
「おじょうさん、ほんとうにありがとうございました。」
と、ていねいにいいました。
ムーミントロールも、いつもよりふかぶかとおじぎをします。こんなにきれいな青い髪の少女に、いままで会ったことがなかったのです。
「ずっとチューリップの中に住んでいたんですか？」



色い光をはなっています。

みんなは力のかぎりボートをこぎました。でも、ヘビはぐんぐん近づいてきます。さあ、長い舌をふるわせ、大きな口をあけました。

「ママ！」

ムーミントロールは、両手で目をおおうと、ぱくりとたべられてしまうのをかくごしました。

ところが、なにもおこりません。おっかなびっくり、ムーミントロールは指のあいだからのぞきました。

ふしぎなことがおこっています。

あのチューリップが、また光りはじめたのです。

すべての花びらがひらき、そのまんなかに、少女がたっています。かがやく青い髪の毛は、足もとまであります。



スニフがさけびました。
「こわがることないよ。」
ムーミントロールは声をふるわせながらいいます。
「なにかたのしい歌をうたおう。そうしたら……。」
そのとき、チューリップの光が消えて、まっ暗になりました。
その暗やみの中から、シューシューと音がしたかと思うと、ハスの葉のボートがぐらぐらとゆれはじめました。
「たいへん、いそぎましょう！　大ヘビがくるわ！」
ママがさけびました。
みんなはしっぽをもっと深く水につけ、力をこめてこぎました。水が葉っぱの上にあふれだしています。
ヘビがおよいでおいかけてきます。意地のわるい顔をして、目は残忍そうな黄

「まあ、足がびしょびしょよ。かぜをひいてしまうわ。」

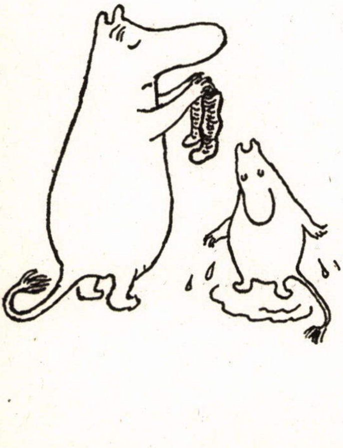
ママはハンドバッグから、かわいたソックスをとりだしました。それから、ムーミントロールとスニフを、大きなまるいハスの葉のボートにのせました。

みんなはしっぽを水につけ、オールがわりにしてボートをこぎ、まっすぐ沼をわたっていきます。

水の中では、根っこのあいだをぬっておよいでいる黒いものが、ちらちらと見えます。水音をたて、はねたりもぐったりしているのです。

いつのまにか、霧がすぐそばまでしのびよってきていました。

「ぼく、やっぱりうちにかえる！」





「でも、用心するんだよ。きみたちの身のためなんだからね。」

そこで、草むらから草むらへ、できるだけこっそりと、すすむことにしました。まわりの黒いどろの中からは、あわがたち、ひそひそ声がきこえてきます。でも、チューリップのランプが光っているかぎりは、安心していられます。

ムーミントロールが足をつるりとすべらせて、沼におっこちそうになりました。でも、ママがあわやというところで手をのばして、ひっぱりあげました。

「ボートにのらないとだめね。」

ママがいいます。

スニフはいいます。
「沼だ。ぼく、あそこへは近づきたくないよ。」
「どうして?」
ママがたずねます。
「だって、あそこには大ヘビが住んでいるんだ。」
スニフは小さな声でそういって、あたりを見まわしました。
「そんなの平気さ。」
ムーミントロールは勇気があるところを見せようとします。
「ぼくたちはとっても小さいから、やつには見えないよ。思いきってあそこをとおらないと、お日さまの光をもう二度と見られないんだよ。さあ、いこう。」
「じゃ、そこまでいっしょにいくよ。」
そういって、スニフはひとことつけくわえます。

よかったら、あなたもいらっしゃいな。」
「よろこんで！」
スニフはそういって、ムーミントロールたちのほうにかけよりました。
「ぼく、道にまよってしまって、もう二度とお日さまを見られないんじゃないかと思ってたんだ。」
そこで、みんなはそろって歩きはじめました。暗い道をてらすために、大きなチューリップを一本もっていくことにして。
それでも、暗やみはますますせまってきます。そこかしこにさいて、あたりをてらしていた花も、木のかげにくると、すこしずつ光をうしない、とうとう消えてしまいました。
水は黒くてらてらと、空気はおもたく、ひんやりとしています。
「ふう、いやだなあ。」

たかなあ。」
（ママがムーミントロールに礼儀をちゃんと教えていることが、これでわかりますね。）
「とんでもない。」
小さな生きものはいいます。（訳者注・この〈小さな生きもの〉は、まだ名まえがついていません。でも、あとのムーミンシリーズでは〈スニフ〉と名づけられていますので、ここでも〈スニフ〉という名でよぶことにしました。）
「ぼくはここにすわって、さびしいなあ、友だちがほしいなあ、と思っていたところだったんだ。きみたちは、いそいでいるのかい？」
「そうなの。」
ママがこたえます。
「わたしたちは家をたてるために、日あたりのよい場所をさがしているの。もし

ママは大きな花のランプを一本つんで、暗がりをてらしだしました。

ほんとうに、そこにうずくまっていたのは、とても小さな生きものでした。気はよさそうですが、すこしおびえているようです。

「ほらね、いったとおりでしょう。」

ムーミントロールのママがいいます。

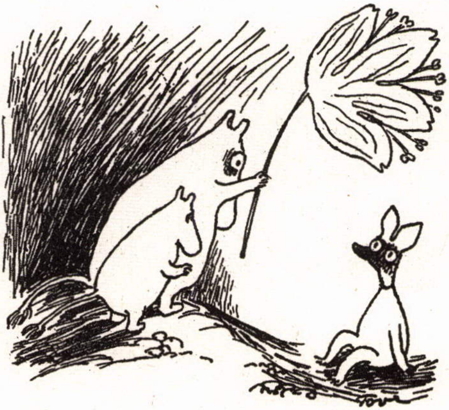
「きみたちは、なにものだい？」

その小さな生きものはたずねます。

「ぼくはムーミントロール。」

勇気をとりもどしたムーミントロールがこたえます。

「ここにいるのは、ぼくのママだよ。ぼくたち、きみのじゃまをしてしまっ





「いないと思うけど。」
ママがいいます。
「でも、もうすこし、いそいだほうがいいかもしれないわ。ただ、たとえ危険なものが近づいてきても、わたしたちはとても小さいから、見つからないと思いたいわね。」
とつぜんムーミントロールは、ママのうでをぎゅっとつかんで、さけびました。
「見て！」
ムーミントロールのしっぽは、おそろしさのあまり、ぴんとたっています。
木の幹のむこうの暗がりから、二つの目がふたりを見つめているのです。
ママもはじめは、ぎょっとしましたが、すぐになだめるようにいいました。
「あの目のもち主は小さな生きものよ。まって。ちょっと光でてらしてみましょう。どんなものでも、暗やみの中では、おそろしいものに見えるのよ。」

「ひかり虫だわ。」

　ムーミントロールのママがいいました。

　でも、いまはそばにいって、じっくり見ているひまはありません。冬がやってくるまえに、もぐりこむ家をたてようと、あたたかくて気もちのいい場所をさがしているのです。

　ムーミントロールという生きものは寒さによわいので、おそくとも十月までには、家ができていなければなりません。

　ふたりはさまよいつづけ、しずけさと暗やみの奥へ奥へと、ふみこんでいきます。

　ムーミントロールは不安になって、ささやくような声でママにたずねました。

「あのあたりに、危険な生きものがいると思う?」



八月もおわりの、そう、夕方に近いころだったでしょうか。

ムーミントロールとそのママは、大きな森のいちばん深いところにやってきました。

あたりは、しんとしずまりかえり、えだのすきまから暗やみが見えます。まるでもう日がくれてしまったかのようです。

あちらこちらに大きな花がさき、そこだけが明かりをともしたランプのように、ぼうっと光っています。

とおくの暗がりでは、つめたいみどり色の小さな点がうごめいています。

●チューリッパ

チューリップの中に住む少女。
その青い髪の毛は、美しく明るくかがやく。



●赤い髪の少年

海が嵐になると、港で見はりをする。



●ニョロニョロ

ひとこともしゃべらずに、
世界じゅうを放浪している。



●コウノトリ

ムーミントロールにめがねを見つけてもらった
おれいに、空からパパをさがすのをてつだう。



おもな登場人物（とうじょうじんぶつ）

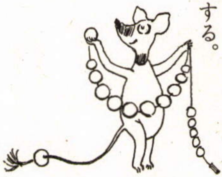
●ムーミントロール

やさしい心と勇気（ゆうき）のある少年。
冬ごもりの家をたてる場所（ばしょ）をさがして、
森の中をママとさまよう。



●スニフ

たいへんなこわがり。
森の中でムーミントロールとママにあい、
いっしょについていくことにする。

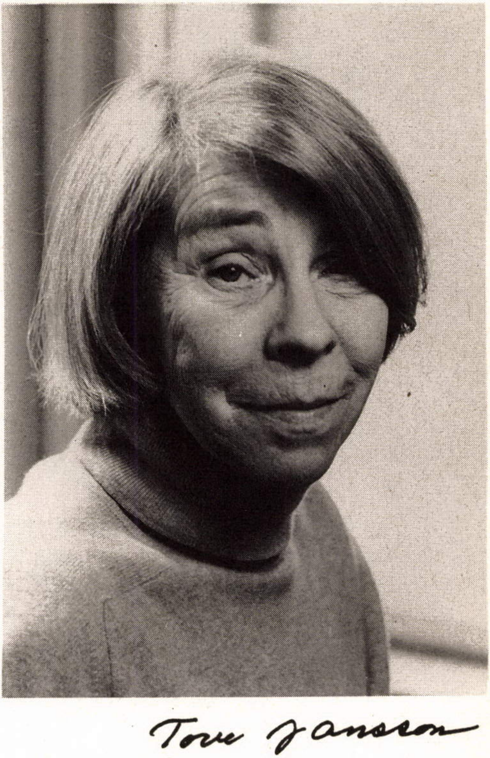


●ムーミントロールのママ

どこかへいってしまったパパを心配（しんぱい）している。
ママのハンドバッグには、
いろいろなものがはいっている。




N.W.
N.E.
W
E
S.W.
S
S.E.
ニョロニョロの
おさびし山
ムーミンやしき
MAP OF MOOMIN VALLEY
ムーミン谷の地図
Tove



Tove Jansson

photo : Per Olov Jansson

頭をひねったあげく、本のタイトルは、「パパをさがすムーミントロール」――「キャプテン・グラント」の探求物語がモデル――のようなものにしたかったのですが、出版社は「小さなトロール」を入れたほうがいいと言いました。そのほうが読者にわかりやすいというのです。

この物語は、わたしが読んで好きだった、子どもの本の影響をうけています。たとえばジュール・ヴェルヌやコローディ（青い髪の少女）などが、ちょっぴりずつ入っています。でも、それがいけないということはありませんよね？　とにかく、これはわたしがはじめて書いた、ハッピーエンドのお話なのです！

トーベ・ヤンソン

一九三九年、戦争の冬のことです。仕事はぱたりといきづまり、絵をかこうとしてもしかたがないと感じていました。「むかし、むかし、あるところに」という出だしではじまる物語を書こうと思ったのも、むりのないことかもしれません。でも、王子さまや、王女さまや、小さな子どもたちを登場させることはやめて、そのかわりに、風刺まんがをかくときサインがわりにつかっていた、怒った顔をした生きものを主人公にして、ムーミントロールという名前をつけました。

とちゅうまで書いた物語は、一九四五年になるまで、そのままほったらかしになっていました。ところが、ある友だちがこう言ったのです。これは子どもの本になるかもしれない。書きあげて、さし絵をつければ、出版できるかもしれないよ、と。

序文



SMÅTROLLEN OCH DEN
STORA ÖVERSVÄMNINGEN

Written and Illustrated

by

TOVE JANSSON

Japanese paperback translation rights arranged
with Schildts Forlags AB, Esbo, Finland
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo.

小さなトロールと大きな洪水

トーベ＝ヤンソン／作・絵
冨原眞弓／訳

講談社 青い鳥文庫

講談社 青い鳥文庫

小さなトロールと大きな洪水

トーベ＝ヤンソン／作・絵
冨原眞弓／訳